

『看護学実習の統合』科目において抽出された学生の課題

林田りか, 吉田恵理子, 高比良祥子

Issues of Nursing Students on “Synthesis of Nursing Practicum”

Rika HAYASHIDA, Eriko YOSHIDA, Sachiko TAKAHIRA

要 旨

『看護学実習の統合』科目を通して、臨地実習の中間期と終了期に学生が抱く課題を明らかにすることを目的とした。対象は看護学科3年次生62名であり、『看護学実習の統合』科目において、臨地実習中間期と終了期にグループワークで抽出された課題をデータとし、時期ごとに内容分析を行った。結果、臨地実習中間期と終了期において【知識・技術・経験の不足】、【看護展開能力の不足】、【コミュニケーションの困難】、【充実したカンファレンスの運営困難】、【自己管理が困難】、【実習環境への適応困難】、【自尊心の低下】の7つの同じ課題が抽出された。サブカテゴリには変化がみられ、臨地実習中間期に比べて終了期の方が具体的な課題内容を掲げていた。本科目において、学生が臨地実習やコミュニケーションに対する不安な気持ちを表出したり、体験した場面を振り返り共有することにより、ストレス軽減や課題の明確化につながったと考える。しかし、個々の学生が体験した現象を深め、意味づけを行うという点はやや不十分であった。今後は、学生の成長を明らかにできるような授業展開方法を検討する必要がある。

キーワード：臨地実習、統合、学生の課題、授業評価

所 属：

長崎県立大学看護栄養学部看護学科

Department of Nursing Science, Faculty of Nursing and Nutrition University of Nagasaki, Siebold

I. 諸言

現在、大学教育全体の大きな課題として、目的意識の希薄化、学習意欲の低下等が挙げられ、多様な学生への対応と併せて学士課程で学生が身に付けるべき学習成果を明確化することが求められている。文部科学省¹⁾は、2011年に「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」にて、『学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標』を作成した。これは、各大学が独自の教育理念や目的に応じて教育課程を編成し、かつ社会に対して必要不可欠な看護実践にかかわる教育の質を保障するための参照基準として作成された。看護実践能力を育成するためには、学生の状況に合わせた効果的なカリキュラムや教授法を開発し実施すること、教員がそれぞれの専門領域の枠を超えて議論し連携していくこと、実践と教育を兼務する教員など多様な人材が教育に参画することなどが必要である。看護職にはこれまで以上に高い能力が求められ、学習環境も大きく変化するなか、看護学基礎カリキュラムの在り方、そして、臨地実習の在り方等の検討も必要になる。早急な、学士課程における看護系人材養成の在り方について全体的な見直しが求められている。

本大学看護学科は、2012年度より今までの看護師・保健師統合カリキュラムから看護師課程教育カリキュラムに変更した。変更に向けて、看護学科全体でワークショップを行い、育てたい学生像、めざす教育、将来構想に関する学科カリキュラムの対応等が話し合われた。看護学科の教育内容の強化・育成を方針とした事項として、以下の6項目があげられた。

- 1) 生活を捉えることのできる能力の育成
- 2) 根拠を持って看護を実践できる能力の育成
- 3) 対人関係能力の養成
- 4) 疾病の予防・健康指導ができる能力の育成
- 5) 物事を追求することができる能力の強化
- 6) リーダーシップ能力の育成

これらの方針を考慮して、臨地実習の間に振り返りの時間を確保し、体験した内容が深められる科目『看護学実習の統合』を総合看護に位置付け、新たに設けた。2014年度から開始されたこの

科目は、昨年度で2回を終えた。

『看護学実習の統合』科目の成果を検討し、今後に向けて実施方法の一部を見直すため、今回は3年次の臨地実習の体験を通して、実習の中間期と終了期に学生が抱く課題を明らかにすることとした。

II. 『看護学実習の統合』授業概要と到達目標

1. 『看護学実習の統合』授業概要

看護学実習の統合の授業は、学生が、3年次の臨地実習（以下、臨地実習とする）での学びを通じて深く『看護』について考え、看護職として成長することを目指す。そして実習グループ、看護領域を越えて、臨地実習の体験を「知識」「技術」「態度」の側面から振り返り、そこから得られた気づきや学びが自己成長の糧になることを目指し、自己のありようと今後の課題を見出す講義および演習である。

2. 『看護学実習の統合』到達目標

- 1) 臨地実習に臨む前の看護者としてのあり方を再確認し、記述することができる。
- 2) 自己の臨地実習の振り返りから、看護に必要な知識、技術、態度を整理し、再確認・再構築することができる。
- 3) 他の学生と実習体験を共有し、臨地実習での学びを意味づけ、総合的に深めることができる。
- 4) 今後のよりよい実習のあり方について、次なる課題を整理することができる。
- 5) 臨地実習の振り返りから、自己の看護観を養い深めることができる。

3. 『看護学実習の統合』授業計画と方法

『看護学実習の統合』の実施期間は、3年次の臨地実習期間の10月～3月である（表1、図1）。授業回数は全15回で構成されている。なお、グループはひとグループ6～7名の10グループで構成され、臨地実習グループとは別のグループに編成した。

1) 臨地実習の開始前期（10月）

臨地実習が開始される前に実習全体のオリエンテーションと母性看護学・小児看護学・成人看護学・老年看護学・精神看護学・在宅看護論の6つ

表1 『看護学実習の統合』における授業計画

回数	主題	授業内容	方法	時期
1	臨地実習で何を学ぶのか	各臨地実習の責任者より重要事項について講義 (全体、母性看護学、小児看護学、成人看護学、老年看護学、 精神看護学、在宅看護論)	講義	10月上旬
2				
3				
4				
5	臨地実習体験の振り返り	臨地実習体験の振り返りの意味と方法について	講義	12月上旬
6	自己の臨地実習体験を語る	自己の臨地実習体験を詳しく語る	グループ ワーク	
7	臨地実習体験の分析と課題抽出・提案	自己および他者の実習体験から現状分析、課題抽出、解決策の提案 を行う		
8				
9				
10	まとめ、発表	グループワークで話し合われた内容をまとめ、発表を行う		
11	自己の臨地実習体験の振り返り、臨地実習体験の分析 と課題抽出・提案	臨地実習体験を振り返り、現状分析、課題抽出、解決策の提案を行 う	グループ ワーク	3月上旬
12				
13				
14	まとめ、発表	グループワークで話し合われた内容をまとめ、発表を行う		
15				

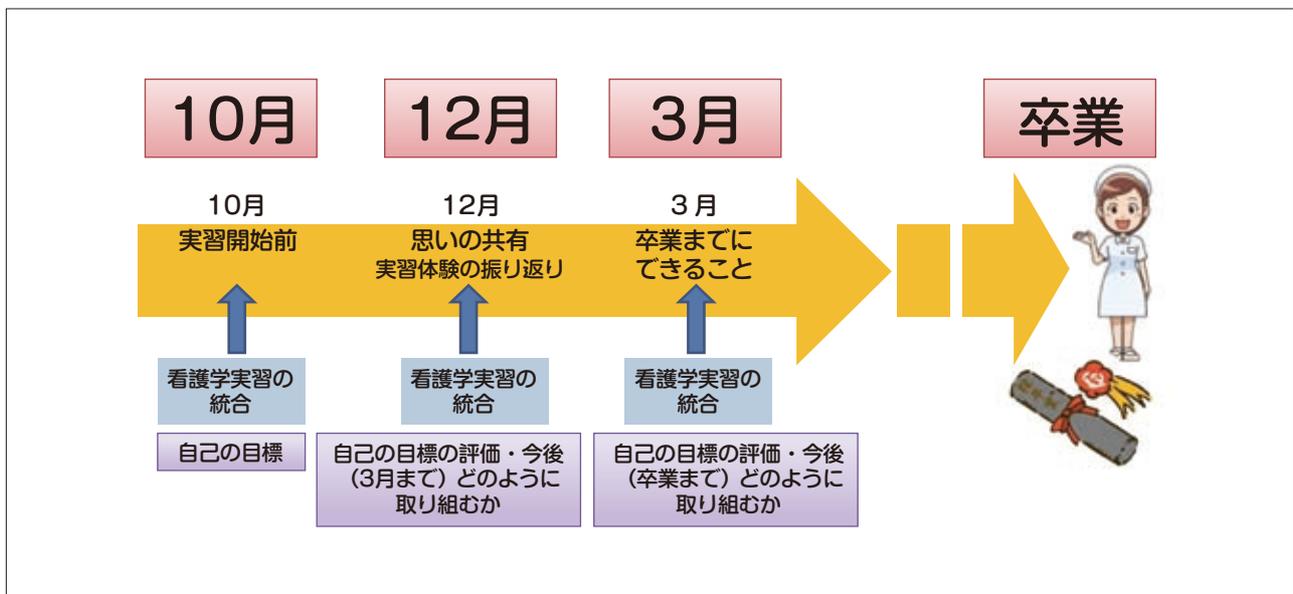


図1 『看護学実習の統合』の授業の流れ

の領域の責任者が、目的や目標・看護を实践するうえで大切にしてほしいことなどについて講義を行う〈1～4回〉。

2) 臨地実習の中間期 (12月)

臨地実習が開始された3か月後には、学生がそれぞれの実習で体験した内容を個人および各グループで振り返り、情報共有を行う〈5～10回〉。

(1) 個人ワーク

まず、個人で振り返りを行う。学生は、今までの臨地実習の体験を整理し、振り返りたい内容は何かを個々で考える。それは何処で発生し、具体的に何が起こったのか、その時にはどのような感

情になりどのような対応をとったのかなどを含め、体験した現状を振り返る。最後に、個人でまとめた内容をグループのメンバーに説明する。この方法は、看護リフレクションの手法²⁾を参考に実施した。

(2) グループワーク

次に、テーマを「スッキリしてお正月が迎えられない原因と考えられるそれぞれの課題、解決策を提案する」とし、そのテーマに沿ってグループワークを行う。方法として、個人が考える現状を付箋紙に記入し、意味・内容が類似したものをまとめ課題とする。いくつかあげられた課題の中から、議論したい課題を1つに決める。1つに絞る

際には、その課題に関する状況・事実の把握を行い、課題に影響を与える要因を検討し、事象を細かく整理していく。そして、課題に対する解決策を提案する。グループワーク時には、作業がスムーズに進むよう相談役としてファシリテータを設けた。グループで話し合われた内容は模造紙に表現され、それを活用してグループワークの最終日に発表する。発表方法は、模造紙3枚を使用し、大きく現状と課題、提案にわけ、教室の壁に掲示し、示説方式で行う。

3) 臨地実習の終了期 (3月)

全ての臨地実習が終了した3月には、12月に行った個人ワークおよびグループワークの内容を振り返りながら作業を行う (11～15回)。

(1) 個人ワーク

12月に行った個人ワークおよびグループワークの内容である、グループの課題や振り返りたい場面、実習時にうまくいったことやいかなかったことなどを思い出しながら、個人作業を行う。そして、看護職としてのあり方とは何かをグループメンバーに説明する。

(2) グループワーク

12月に各グループで設定した現状・課題・提案を振り返り、更に個人で整理した内容を含め、グループワークを行う。その時のテーマは、「理想とする看護師像に近づくため、卒業までにできることを提案する」である。手順は中間期と同様の方法を使って作業を行う。グループで話し合われた内容は模造紙に表現され、中間期と同様に現状と課題、提案にわけ、示説方式で行う。

4) 自己の目標確認

実習開始前期、中間期、終了期に学生個人の強みや課題、目標等を記述させ、それぞれの時期で強みと課題の変化や次につながる目標を確認する。それをポートフォリオとして活用するため、各看護領域実習の教員へ配布し共有した。最終的には、卒業までに学生個人がどのような課題を残し達成することができるのか見通しを持たせるようにした。

Ⅲ.研究目的

3年次の臨地実習の体験を通して、実習の中間期と終了期に学生が抱く課題を明らかにすること

を目的とする。

Ⅳ.研究方法

1. 調査対象

長崎県立大学看護学科3年次生62名とした。

2. 調査期間

平成27年10月～平成28年3月。

3. データ収集方法

各グループでまとめた課題をデータとした。

4. 分析方法

臨地実習の中間期 (12月) と終了期 (3月) に各グループで抽出された課題をコード化し、それを時期ごとに内容分析の手法を参考に、意味内容の類似したものをサブカテゴリにまとめ、最終的にカテゴリ化した。

5. 倫理的配慮

学生には、研究の目的、方法、参加・不参加は自由であること、不参加の場合でも不利益を受けることはないこと、個人情報の匿名性と機密性は厳守すること、データ保管と処理等について口頭で説明し、同意を得た。

Ⅴ.結果

以下、カテゴリを【 】で、それを構成するサブカテゴリを〈 〉で示す。

1. 臨地実習中間期に学生が抱く課題

分析の結果、臨地実習中間期に学生が抱く課題は、84コードから29のサブカテゴリ、7個のカテゴリが抽出された (表2)。

1) 【知識・技術・経験の不足】

【知識・技術・経験の不足】は、学生が各領域における臨地実習の中で、看護を展開するにあたり、自らの知識・技術・経験・学習の不足を感じていることを示す。このカテゴリは〈知識不足〉、〈経験不足〉、〈学習不足〉、〈技術不足〉の4つのサブカテゴリから構成された。

2) 【看護展開能力の不足】

【看護展開能力の不足】は、学生は実際に患者を受け持ち、看護展開をするにあたり、自身の表現力の不足を感じるとともに看護過程という思考プロセスを活用しながら患者個々のニーズを踏まえた個別性のある看護がうまくできないことを課題としていた。また、記録が多いことにも負担を

表2 臨地実習中間期に学生が抱く課題

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
知識・技術・経験の不足	知識不足	4
	経験不足	1
	学習不足	2
	技術不足	3
看護展開能力の不足	看護過程がうまく展開できない	3
	記録が多く負担	4
	表現力不足	2
	患者の状態やニーズに合わせた看護が難しい	4
	個別性を考えたケアを行うのが難しい	1
コミュニケーションの困難	コミュニケーション能力不足	4
	患者とコミュニケーションをとるのが難しい	4
	教員と上手く関わることができない	4
	指導者と上手く関わることができない	4
	看護師と上手く関わることができない	4
	グループメンバーとの関わりが難しい	4
	患者との距離感が難しい	3
	患者と上手く関わることができない	2
	患者の家族との関わりが難しい	2
充実したカンファレンスの運営困難	カンファレンスの進行がうまくいかない	3
	有意義なカンファレンスが行えない	2
自己管理が困難	時間管理がうまくできない	2
	自己管理不足	2
	体調管理不足	2
実習環境への適応困難	環境に適応できない	3
	看護学生という立場の制限	4
	交通費が高く経済的に負担	2
自尊心の低下	ストレスが高く精神的に負担	4
	自尊心が低下する	3
	自信がない	2

感じていた。このカテゴリは、〈看護過程がうまく展開できない〉、〈記録が多く負担〉、〈表現力不足〉、〈患者の状態やニーズに合わせた看護が難しい〉、〈個別性を考えたケアを行うのが難しい〉の5つのサブカテゴリから構成された。

3) 【コミュニケーションの困難】

【コミュニケーションの困難】は、学生が患者だけでなく、グループメンバー、指導者、看護師、教員との関わりに難しさを感じていることを示す。このカテゴリは、〈コミュニケーション能力不足〉、〈患者とコミュニケーションをとるのが難しい〉、〈教員と上手く関わることができない〉、〈指導者と上手く関わることができない〉、〈看護師と上手く関わることができない〉、〈グループメンバーとの関わりが難しい〉、〈患者との距離感が難しい〉、〈患者と上手く関わることができない〉、〈患者の家族との関わりが難しい〉の9つのサブカテゴリから構成された。

4) 【充実したカンファレンスの運営困難】

【充実したカンファレンスの運営困難】は、有

意義なカンファレンスをしたと思うが、カンファレンスの進行を含め、学生がカンファレンスを難しいと感じていることを示す。このカテゴリは、〈カンファレンスの進行がうまくいかない〉、〈有意義なカンファレンスが行えない〉の2つのサブカテゴリから構成された。

5) 【自己管理が困難】

【自己管理が困難】は、学生自身が体調や時間の管理など、自己管理が難しいと感じていることを示す。このカテゴリは、〈時間管理がうまくできない〉、〈自己管理不足〉、〈体調管理不足〉の3つのサブカテゴリから構成された。

6) 【実習環境への適応困難】

【実習環境への適応困難】は、日々変化する実習環境に学生という立場を踏まえながら適応していくことに難しさを感じることを示す。このカテゴリは、〈環境に適応できない〉、〈看護学生という立場の制限〉、〈交通費が高く経済的に負担〉の3つのサブカテゴリから構成された。実習環境には、各実習施設への交通費が高く、経済的にも負

担を感じていることも表出された。

7) 【自尊心の低下】

【自尊心の低下】は、学生が実習に伴い、精神的負担、自信のなさを感じていることを示す。このカテゴリは、〈ストレスが高く精神的に負担〉、〈自尊心が低下する〉、〈自信がない〉の3つのサブカテゴリから構成された。

2. 臨地実習終了期に学生が抱く課題

臨地実習終了期に学生が抱く課題は、70コードから30のサブカテゴリ、7個のカテゴリが抽出された(表3)。なお、得られたカテゴリは、臨地実習中間期に看護学生が抱く課題と同様の7個のカテゴリに集約されたが、実習の経過に伴い、学生の抱く困難の中身であるサブカテゴリに変化がみられたため、結果には、抽出されたサブカテゴリに加え、変化したサブカテゴリの内容を記載する。

1) 【知識・技術・経験の不足】

【知識・技術・経験の不足】は、〈知識不足〉、〈学習不足〉、〈語彙力不足〉、〈経験不足〉、〈技術不足〉、〈ケア実施時の配慮とスムーズさが不十分〉の6つのサブカテゴリから構成された。学生は、臨地実習中間期に感じていた〈知識不足〉、〈学習不足〉、〈経験不足〉、〈技術不足〉という課題は継続しながらも、〈語彙力不足〉、〈ケア実施時の配慮とスムーズさが不十分〉という具体的な課題を抱いていた。

2) 【看護展開能力の不足】

【看護展開能力の不足】は、〈情報収集がうまくできない〉、〈アセスメントを深められない〉、〈看護過程がうまく展開できない〉、〈主体的な看護ができない〉、〈時間内に充実した記録をすることが難しい〉、〈患者のニーズに合わせた看護が難しい〉、〈個別性を考えたケアを行うのが難しい〉、〈正確な報告・連絡・相談ができない〉の8つの

表3 臨地実習終了期に学生が抱く課題

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
知識・技術・経験の不足	知識不足	7
	学習不足	1
	語彙力不足	1
	経験不足	2
	技術不足	4
	ケア実施時の配慮とスムーズさが不十分	2
看護展開能力の不足	情報収集がうまくできない	1
	アセスメントを深められない	3
	看護過程がうまく展開できない	4
	主体的な看護ができない	1
	時間内に充実した記録をすることが難しい	4
	患者のニーズに合わせた看護が難しい	2
	個別性を考えたケアを行うのが難しい	3
	正確な報告・連絡・相談ができない	1
コミュニケーションの困難	コミュニケーション能力不足	6
	患者とコミュニケーションをとるのが難しい	1
	教員と上手く関わるができない	2
	指導者と上手く関わるができない	2
	看護師と上手く関わるができない	2
	人間関係・信頼関係の構築が難しい	2
	患者との距離感が難しい	1
	患者と上手く関わるができない	2
	患者の家族との関わりが難しい	1
充実したカンファレンスの運営困難	充実したカンファレンスが行えない	3
自己管理が困難	自己管理不足	1
	体調管理不足	2
実習環境への適応困難	環境に適応できない	3
	看護学生という立場の制限	2
自尊心の低下	意思が弱い	2
	自信がない	2

サブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた、〈記録が多く負担〉、〈表現力不足〉という困難は表出されなかったが、〈情報収集がうまくできない〉、〈アセスメントを深められない〉といったように、看護過程のどこが困難なのかを具体的に表現していた。

3) 【コミュニケーションの困難】

【コミュニケーションの困難】は、〈コミュニケーション能力不足〉、〈患者とコミュニケーションをとるのが難しい〉、〈教員と上手く関わることができない〉、〈指導者と上手く関わることができない〉、〈看護師と上手く関わることができない〉、〈人間関係・信頼関係の構築が難しい〉、〈患者との距離感が難しい〉、〈患者と上手く関わることができない〉、〈患者の家族との関わりが難しい〉の9つのサブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた、〈グループメンバーとの関わりが難しい〉という困難は表出されなかった。一方で、コミュニケーションの根底にある、〈人間関係・信頼関係の構築が難しい〉という困難を抱いていた。

4) 【充実したカンファレンスの運営困難】

このカテゴリは、〈充実したカンファレンスが行えない〉の1つのサブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた〈カンファレンスの進行がうまくいかない〉、〈有意義なカンファレンスが行えない〉という困難の表出はなかったが、実習を経験するとともに学生は、〈充実したカンファレンスが行えない〉ことを困難に感じていた。

5) 【自己管理が困難】

このカテゴリは、〈自己管理不足〉、〈体調管理不足〉の2つのサブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた〈時間管理がうまくできない〉は表出されなかった。

6) 【実習環境への適応困難】

このカテゴリは、〈環境に適応できない〉、〈看護学生という立場の制限〉の2つのサブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた〈交通費が高く経済的に負担〉は表出されなかった。

7) 【自尊心の低下】

このカテゴリは、〈意思が弱い〉、〈自信がない〉

の2つのサブカテゴリから構成された。臨地実習中間期に感じていた〈ストレスが高く精神的に負担〉、〈自尊心が低下する〉は表出されなかった。

VI.考察

1. 臨地実習中間期・終了期に学生が抱く課題の特徴

本研究の結果より、学生は臨地実習を通して、【知識・技術・経験の不足】、【看護展開能力の不足】、【コミュニケーションの困難】、【充実したカンファレンスの運営困難】、【自己管理が困難】、【実習環境への適応困難】、【自尊心の低下】の7つの課題を抱くことが明らかになった。臨地実習の中間期と終了期の両時期に同じカテゴリが抽出され、臨地実習中に学生が抱く課題の可視化が行われたと考える。

一方、学生の抱く課題は、臨地実習の中間期と終了期においてサブカテゴリに変化が見られた。【知識・技術・経験の不足】では、終了期に〈ケア実施時の配慮とスムーズさが不十分〉のサブカテゴリが含まれた。学生は、臨地実習が後半となりケアの実施を重ねるごとに、看護技術のどの部分が不足しているのか具体的な課題を見出すことができたのではないかと考える。また、【看護展開能力の不足】では、終了期に〈情報収集がうまくできない〉、〈アセスメントを深められない〉、〈正確な報告・連絡・相談ができない〉のサブカテゴリが含まれた。情報収集、アセスメント、報告・連絡・相談は、看護を展開する上での必須項目である。学生は、臨地実習終了期には、看護展開のどこが困難なのかを具体的に表現しており、課題を通して成長が見られているのではないかと考える。

また【コミュニケーションの困難】では、臨地実習の中間期、終了期を通して、学生は患者、家族、教員、指導者、看護師、グループメンバーとのコミュニケーションに困難を感じていた。看護において、患者とのコミュニケーションは患者との関係形成や患者のニーズの把握などを目的として行われ、看護者にとって必要不可欠なものである³⁾。また、学生が教員や指導者、看護師、グループメンバーとコミュニケーションをとり関係を構築することは、臨地実習を円滑に遂行し実習

目標を達成するために必要な事である。一方、看護学生のコミュニケーション能力の不足が指摘され、コミュニケーションの教育内容の強化が明示されている⁴⁾。臨地実習での経験を通して学生がコミュニケーションを課題と認知することは能力育成のために必要であり、各領域の実習において教員が意識して関わる必要のある課題と考える。酒井⁵⁾は、過去の体験、自己に対する否定感、過剰な他者への意識、あるべき自分との葛藤が、学生の対人関係における苦手意識を形成しており、学生が自分の対人関係の特性を自覚することを促し、自己受容を進められる関わりが重要だと述べている。本学の『看護学実習の統合』は、臨地実習グループとは別のグループ編成とし、看護リフレクションの手法を参考に、学生が臨地実習で経験した内容を個人およびグループで振り返りを行っている。教員は学生に対し、振り返りたい内容を自分で選択し自分を表現することや、他の学生の振り返りを傾聴することを促している。このように、学生が臨地実習の振り返りを通して素直な自分を表現することや人に受け入れられる体験は、自分の対人関係の特性を自覚し、自己受容を進める支援となりうるのではないかと考える。

そして学生は、【充実したカンファレンスの運営困難】を課題と捉えていた。カンファレンスは集団の中の意思の通じ合いの場であり、専門職としての確かな情報に基づき、患者へのよりよいケアをめざして、さまざまな提案およびそれに関連した討議が行われる⁶⁾。看護の視点からカンファレンスは重要であるが、学生は中間期にはカンファレンスの進行、終了期にはカンファレンスの質の確保を課題と捉えていた。このため、各領域の実習において教員は、臨地実習開始から中間期はカンファレンス運営の支援、中間期から終了期はカンファレンスの充実の支援など、時期に合わせてカンファレンスへの関わり方を変化させる必要があると考える。

また学生は、【実習環境の適応困難】という課題を抱いていた。本学は附属病院を持たず、臨地実習を多施設で行っている。そのため学生は、新たな実習環境に適応することに労力を要し、さらに実習目標を達成するという学習課題を持つ。学生は〈看護学生という立場の制限〉から、役割や

時間に制限がある中での患者への関わりに困難を抱くことも明らかになった。教員は学生の抱く【実習環境への適応困難】に対し、より細やかな配慮を行う必要があるのではないかと考える。

さらに学生は【自己管理が困難】、【自尊心の低下】という内面的な課題を抱くことが明らかになった。臨地実習は、学生が主体的な実践を通して看護を学び、自己成長の機会となるプログラムである。一方で学生は、実習中に緊張、不安、疲労、困惑が強く、ストレスフルな状況にある⁷⁾と報告されている。高島ら⁸⁾は、脅威などのストレス感情を含めて学生の具体的な経験の振り返りを支援することが、学生の実習ストレスを軽減し達成感を高めるための有効な介入となり得ると述べている。本学の『看護学実習の統合』科目において、各領域の実習を超えて看護場面の振り返りを行い、ストレス感情についての語り合いの場をつくることは、学生の実習ストレスを軽減する方策となると考える。

2. 臨地実習を通して学生が抱く課題をふまえた『看護学実習の統合』科目への示唆

本研究で抽出された学生が抱く7つの課題において、【看護展開能力の不足】、【コミュニケーションの困難】は、臨地実習において学生が抱く大きな課題であることが明らかとなった。田村⁹⁾は、Kolbの経験型学習モデルで自分の看護実践をリフレクションする場合、対話で重要なことは、物事が正しいか間違っているかではなく、現実的で理解できるかどうかであり、自由ムードの中の真剣な話し合いのなかで、相手をよく知ることができるよう意味のあるコミュニケーションであると述べている。今回の個人ワークおよびグループワークを通して、個々の学生が抱える臨地実習やコミュニケーションに対する不安や困難感は、グループメンバーと実習体験や考えを共有することにより軽減できたと考える。更に、学生同士が気兼ねなく自由に話し合える環境をつくり、それぞれの課題や解決策を見いだせたことは、対人関係能力の向上の一助となり、効果的な方法であったと考える。しかし、個々の学生が体験した現象を深め、意味づけを行うという点はやや不十分であった。今後は、学生が実習体験を振り返る

際に、個々の学生が掲げている課題や目標に関連づけながら、体験した現象を意味づけし、個人ワークを行う必要がある。また、体験した内容を学生が語る際には、現象を掘り下げて検討できるよう、ファシリテータの有効な介入を促す必要があると考える。

『看護学実習の統合』科目の授業内容は、個人およびグループワークの他に実習開始前期、中間期、終了期に学生個人の強みや課題、目標等を記述させ、それぞれの時期で強みと課題の変化や次につながる目標を確認する作業を行っている。これは、実習期間中と卒業までに学生自身が達成できる課題と目標の見通しを持たせるために行っている。現在は、実習期間中において学生自身の課題と目標の変化は確認することができるが、3年次後期の臨地実習終了期から4年次の卒業までの期間は課題と目標を確認することができない。そのため、本科目が終了しても、他の科目において学生自身の課題を継続して見直し、整理していけるような工夫が必要であると考え。一貫した目標の確認ができるシステムづくりにより、学生の学習意欲の向上につなげる必要がある。

今回の研究目的は、臨地実習の体験を通して学生が抱く課題を明らかにすることであった。今後は課題を抽出するだけでなく、学生の成長を明らかにできるような授業展開方法を検討する必要がある。

Ⅶ. 結論

- 1) 臨地実習の中間期と終了期に、学生が抱く課題を明らかにすることを目的として研究を行った。
- 2) 臨地実習中間期と終了期の課題は同じカテゴリが抽出され、【知識・技術・経験の不足】、【看護展開能力の不足】、【コミュニケーションの困難】、【充実したカンファレンスの運営困難】、【自己管理が困難】、【実習環境への適応困難】、【自尊心の低下】の7つであった。
- 3) サブカテゴリには変化がみられ、臨地実習中間期に比べて終了期の方が具体的な課題内容を掲げていた。
- 4) 『看護学実習の統合』科目において、看護場面の振り返りの場を設け、課題を明確にできた

ことは効果的であったと考える。

- 5) 今後は学生の成長を明らかにできるような授業展開方法を検討する必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様、看護学科教員の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2011) : 「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」最終報告. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf.
- 2) 東めぐみ : 看護リフレクション入門, 33-34, ライフサポート社, 横浜市, 2009.
- 3) 阿部智美 : 患者とのコミュニケーション困難場面における看護学生の「解説, 問題解決, 感情」との関連, 日本看護研究学会雑誌, 36 (1), 149-156, 2013.
- 4) 厚生労働省医政局看護課 (2007) : 「看護基礎教育の充実に関する検討会」報告書. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>.
- 5) 酒井美子 : コミュニケーションが苦手な看護学生の対人関係の特性から教育的支援を考える, 群馬県立県民健康科学大学紀要, 5, 103-114, 2010.
- 6) 川島みどり, 杉野元子 : 看護カンファレンス第3版, 8-10, 医学書院, 東京, 2008.
- 7) 樋之津淳子, 林啓子, 村井文江, 高島尚美 : 臨地実習における看護学生の気分変化と自律神経反応との関連, SCU Journal of Design & Nursing, 1 (1), 31-34, 2007.
- 8) 高島尚美, 大江真琴, 五木田和枝, 渡部節子 : 成人看護学臨地実習における看護学生のストレスの縦断的变化 心理的ストレス指標と生理的ストレス指標から, 日本看護研究学会雑誌, 33 (4), 115-121, 2010.
- 9) 田村由美 : 日々の振り返りを積み重ね、リフレクションを深化させよう, 看護教育, 55 (3), 190-196, 2014.

